

(1) 反抗

丸山眞男は小学校時代の終わりに7年制の武蔵高等学校を受験するも不合格となり、1926(大正15)年4月、東京府立第一中学校に入学する(画像:東京府立第一中学校校長・川田正激〈『東京府立第一中学校創立五十年史』1929年〉)。



一中は軍人の子弟が多い四中などと比べると「リベラル」だったが、「典型的に生意気な都会っ子」「プラス優等生」気質で、丸山は自己嫌悪に陥った。また、一中には学校の方針に従順な優等生グループ、不良グループ、不良というほどではないが学校の方針に反感を持つ反正統派という三種類の学生たちがいた。丸山自身はこのうち反正統派にシンパシーを感じていたが、不良グループの生徒(楠原)とも親交があった。この点は兄鐵雄の影響もあったようである。

ぼくは、亡くなった兄貴に非常に感謝しているのです。もし兄貴なかりせば、ある意味でぼくは非常に平凡な、府立一中のあんまり秀才でもないけれども、模範生だったかもしれない。それが拗ねてしまって、一中に対しても反抗し、校風に対しても反抗した。兄貴の影響で、悪いことは全部兄貴に教わった。その悪いことは探偵小説をはじめとして、みんな人生にと

って非常にプラスになっています。(『定本 丸山眞男回顧談』上)

一中の同級生には神谷源兵衛、塙作楽(岩波書店編集者)、松本武四郎(医学者)、松浪信三郎(哲学研究者)、小田村寅二郎(右翼活動家、日本思想に関する編著がある)、林基(渡辺基、日本史学者)などがいた(肩書はいずれも後年のもの)。

塾をサボって映画館に通う生活は小学校時代と変わらなかったため、4年次のときの第一高等学校受験には失敗してしまう。伯父の井上亀六はわざわざやってきて、「落ちてよかった。秀才じゃないほうがいいんだ。秀才が日本を毒した」と慰めたという。合格組が抜けた5年次は落ちこぼれとして過ごしたが、反面、受験勉強からも解放されて自由な学校生活を満喫することができた。